玉座の上の最初の近代人

——神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世——

寺崎章二

一、諸文明の〃接触前線〃に生きる王者

哲学者ディルタイの『世界観の研究』冒頭「序論・諸体系の抗争に就いて」の中に次のような印象的な個所がある「……近世欧羅巴(ヨーロッパ)諸民族の信仰教理や彼等の哲学的教義もまた、ホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ第二世の宮廷で回教徒とキリスト教徒とが彼等の信条を相互に比較し合いそうしてイヴン・ロシュドとアリストテレスの哲学がスコラ哲学者の目にふれるようになって来たときから、その普遍妥当性を痛く動揺せしめられたのであった……」(1)

ここで語られているのは、異った世界観を持った人々が実際に出会い、知的討論を交したという事実である。ここで直ちにわれわれは、あの『ミリンダ王の問い』を連想するかも知れない。紀元前一世紀、中央アジアのバクトリアを治めたギリシア系の王ミリンダ（メナンドロス）は、高徳のインド仏僧ナーガセーナと問答を交す。ここにも二つの異った世界観の文学的表現がある。

私はいつも思うのであるが、世界史上、時として「異った世界観の知的接触前線」とでも言うべきものが生ずることがある。もちろんそれは、ひとつの文化の中心部には決して現われない。必ず辺境において、必ず周辺部においてである。とは言うものの、異った世界観の接触は必ずしも知的に行われた訳ではなかった。逆に、世界観どうしはほとんどいつでも異った世界観を持った社会（あるいは文明あるいは民族）どうしの武力的衝突、という不幸な形で接触したと断言してよい。

私は生半可な「相互理解」や「話し合い」に与する者では絶対にない。「理解」を言うなら、インカ帝国の人々は自分たちの築いた見事な文明が僅か二百人ほどのスペインの荒くれ男たちによってあっけなく崩壊した時、身をもって敵のスペイン人を理解した訳であろう。

逆に、歴史の中で「寛容」が自明の美徳であった時代は、ごく短い。そしてひとは、ややもすると自分の持つ「寛容」理念を他の時代に適用してその不寛容を責め、稀に「寛容」らしきものを歴史の中に見出すと、たちまちそれを賞揚するのに急なものである。同じ「寛容」の名で呼ばれる二つの精神態度が、実は全く異った歴史的条件から生まれた、ほとんど別物であることには目を閉じたがることはないか。筆者はそのような例を本稿の主題フリードリヒ二世に対する後世の評価の中に見出すことができると思うものである。

二、シチリアの神聖ローマ皇帝

フリードリヒ二世とはどんな人物か。順序よく、しかも印象深く説

明したい。彼はしばしば「玉座の上の最初の近代人」という異名で呼ばれる。また、ラテン語で彼につけられた異名が stupor mundi であり、これは「世界の驚異」というほどの意味である。当然彼は「最初のルネサンス人」とも呼ばれることがある。

それ故、このフリードリヒ二世を、同名のプロイセンの大王フリードリヒ二世とまず区別して頂きたい。かの大王の名は近代史上あまりに名高いが、公平に言ってもう一人のフリードリヒ二世より偉大で興味ぶかい人物であるとは断言できない。ちなみに、私は本稿を草するため、後者すなわち神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世についての文献を、国立国会図書館で探したが、その名を冠した単行書[2]は遂に一冊も同図書館には架蔵されていなかった。もちろん、他方のフリードリヒ大王については挙げきれぬほどの文献があった。

さよう、私が本稿によって述べたいのはホーエンシュタウフェン家出身の神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世についてである。ただし私の意図はフリードリヒその人について、何らかの一次史料を用いて研究しようとするのではまったくない。さきほどから述べているように、「玉座の上の最初の近代人」「世界の驚異」「反キリスト」等々の異名を持つ彼の像を、異名につき纏う誇張や誤解をもそのままに、比較的ありふれた資料を用いて描いて見ようというのであった。誤解のされ方だってひとつの重要な歴史的事実であり得るのである。

フリードリヒ二世がその上にあった玉座とは神聖ローマ帝国の帝位であった。いったい、西洋史の上で説明し難い事柄はいくらもあるが、この「神聖ローマ帝国」もその最たるものの一つであろう。世界史・西洋史の教師たちに「あなたは学生に神聖ローマ帝国をどう説明しますか、そして理解させることができますか」というアンケートを取って見ると良い。回答は歯切れが悪い筈である。

「神聖ローマ帝国とは、中世から近世初頭にかけてのドイツのことである」とまず言った上で、いろいろ説明を追加せねばならない。名称のいかめしさにひきかえ、実体の伴わぬものであったというために、例の〝神聖でもなく、ローマ的でもなく、帝国でもない〟というヴォルテールの嘲笑の言葉を引き合いに出すのも良いであろう。いくつかの王朝がこの帝位に就いたが、十五世紀以降はハプスブルク家が独占的にその地位にあり、この帝国はナポレオンによって解体される一八〇六年まで存続したこと、いや実質的なその継承者であるオーストリア・ハンガリー二重帝国が消滅したのはやっと二十世紀の第一次世界大戦の結果であったこと、等々をも述べる必要があろう。

ホーエンシュタウフェン家は十二世紀中葉から十三世紀中葉まで、中断をはさみながら六代にわたって神聖ローマ皇帝位（つまり実質的にドイツ王位）を占めた。その中では赤髭王フリードリヒ一世が比較的われわれの耳に親しい。しかしその孫フリードリヒ二世こそはいっそう極立った個性と、彼の置かれた奇異な状況によって興味深い存在なのである。

四十代あまりを数える神聖ローマ皇帝の中にあってフリードリヒ二世が断然ほかと変っている点は、彼が生涯の大半をシチリアに過したことである。この風変りさは、代々奇人変人が多かったハプスブルク家を以てしても及ばない。

前に引用したディルタイの文章中の「……回教徒とキリスト教徒とが彼等の信条を相互に比較し合った……」ところのフリードリヒの宮廷は、ウィーンにあったのでもプラハにあったのでもない。実に、椰子の樹が茂り、バナナがなり、サボテンの花咲くシチリアのパレルモの町にあった。そして、考えて見るとそのことは必ずしも偶然ではなかった。中世におけるシチリアの歴史的・地政的状況がそうさせたのである。

シチリア？　さよう、イタリア長靴半島の爪先のシチリア（シシリ

ー）島である。今日、われわれがマフィアかオレンジをしか連想しないようなシチリア、そのパレルモの町に彼フリードリヒは宮廷を置いたのであった。

近代史においてこそシチリアは無視しても構わないようなちっぽけな島である。しかし、古代については触れぬとしても、この島は中世の一時期たしかにヨーロッパ史の一焦点であった。この島が地中海中部の要衝を占め、特に東部地中海からローマ方面ティレニア海への入口を扼していることは地図を見るまでもなく明瞭である。ところがそれ以上にこの島は、諸民族・諸文化の会合点となった。私いうところの〝接触前線〟である。

かつてローマ人が〝われらの海〟と称した地中海はやがて七世紀以降〝イスラムの湖〟と化する。続いて九世紀から西ヨーロッパの大西洋岸を劫略し始めていたノルマン人（ヴァイキング）は、十一世紀になると長駆ジブラルタル海峡を抜けて西地中海へ進出する。さらに彼らの首領ロベール・ギスカール（ロベルト・グィスカルド）は南イタリアにおけるビザンツ（東ローマ帝国）の支配に終止符を打ち、シチリアをイスラムの手から奪って、ここにノルマン国家を建設した。やがてロジェール二世（在位一一三〇―一二五四）が「両シチリア王国」の初代の王として地中海におけるノルマン勢力の最盛時を現出する。わがフリードリヒ二世はロジェール二世の女系の孫に当る。すなわちロジェールの娘コンスタンツァが、神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世に嫁して儲けたのがフリードリヒ二世であった。

点線はシチリア王国の最大版図

ここで一度前に戻って、神聖ローマ帝国に説明をつけ加えると、この「帝国」は、絶えず実力以上に「イタリア政策」にかまけ、教会すなわちローマ教皇と対立したという西洋中世史の常識を繰り返さねばならないのだが、それにしてもシチリアとは？　とわれわれは怪訝の念を押え切れないのではあるまいか。

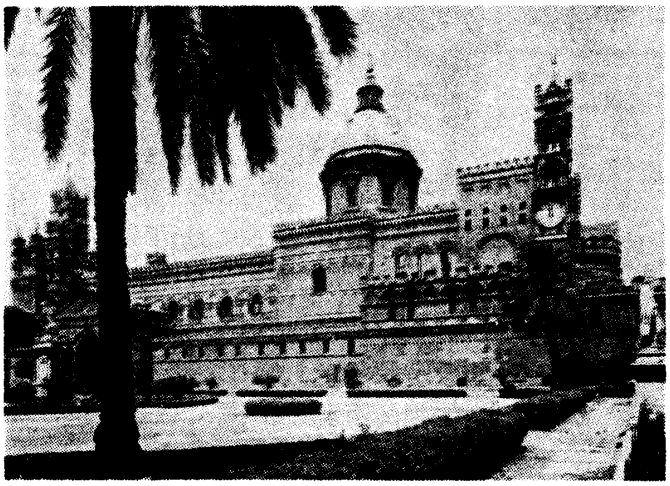
ハインリヒ六世も伝統的なイタリア政策に従い、何度か兵をドイツからイタリアへと進めた。一一九一年、彼はローマにおいて神聖ローマ皇帝としての戴冠をおこない、ついで一一九四年、両シチリア王タンクレドの死に乗じてその位を要求し南イタリアとシチリアを征服し、シチリア王の王冠をも戴くことになる。この時、ハインリヒの妻コンスタンツァはアプリア（イタリア長靴半島の踵の部分）の小さな町イエシで男子を出生した。クリスマス翌日のことであった。この子が後のフリードリヒ二世である。父ハインリヒは一一九七年に夭逝し、幼いフリードリヒはシチリアのパレルモにおいて成長することになる。翌年、母后コンスタンツァは僅か三歳のフリードリヒをシチリア王に即かせる。母后はすぐに没し、孤児の未来はまったく不確定なものであった。父の帝冠がやがて子の頭上に戴るという保障もなかった。この幼な児が、やがて「玉座の上の最初の近代人」と呼ばれるだろうことを予言できた人は一人もいなかっただろう。

性急な答えを出すことを避けて、いくつかの点から如上の疑問を徐

々に解いて行きたい。いくらかでも説得的なフリードリヒ二世像を提示することができれば、「玉座の上の最初の近代人」はシチリアにこそ生まれねばならなかったことが自ずと理解されるであろう。その時、本稿の意図はかなり達成されたことになる。

三、パレルモ、ダンテ

さきほどの簡単な説明からでも分るように、フリードリヒ二世が出現した十三世紀当時のシチリア（および南イタリア）は、ビザンツ、イスラム、ノルマン、それに西方カトリック世界、と三つも四つもの文化が混在する一種不思議な精神風土を作り出していた。フリードリヒの治世一二一五―一二五〇年は、あたかも第四回十字軍と第五回十字軍[3]の間に相当するが、人はこの時期のシチリアにおいて、歴史にも稀な「世界観の見本市」の如きものを見ることができるのである。



パレルモのカテドラーレ（大聖堂）

筆者は数年前、シチリアへ旅したことがある。フリードリヒについて何かを見たいと思ったからでもある。彼についての文献をコピーして持参し、パレルモの町に二泊、シチリア全体では五泊したが、どこでも多く聞かされるのは「ルジェロ」（つまりロジェールのイタリア語読み）の名の方であって、フェデリコことフリードリヒについてはやや期待はずれであった[4]。ついでに言うと、シチリア東岸南岸の歴史的遺跡はこれすべて古代ギリシアである。私はこの島南岸の町、アグリジェント郊外においてほど数多くのギリシア神殿をいち時に見たことがない。

パレルモの大聖堂の中には彼の墳墓がある。鮮紅色の巨大な石棺で、上蓋には獅子が座し、側面の円形浮彫りにはキリスト、マリア、四人の福音書作者が見られる。存命中から同時代人によって「反キリスト」と罵られたフリードリヒにしても、遺骸が葬られているのはやはりキリスト像・マリア像で飾られた棺の中であった。

そういえば、われわれは当時最大最高の文学作品の中にフリードリヒの名を見出す。『神曲』の地獄篇第十歌、第六の圏谷の火[5]を吐く墓の中で焼かれているのである。『神曲』では他にも二個所、いずれも地獄篇でフリードリヒについての言及がある[6]。もちろん、イタリア名前でフェデリーゴ二世と呼ばれている。ダンテが地獄篇を書いたのは一三一〇年より以前と言うから、フリードリヒの死後六十年ほどであり、彼についての記憶がまだ生々しかった頃である。ここにはフリードリヒに対する厳しい断罪がある。ただしダンテは学芸の保護者としてのフリードリヒを高く評価し、彼の宮廷において最初のイタリア詩派が（もちろんトスカナ語でなくシチリア・アプリア方言によるものだが）生まれたことを称賛している[7]。

しかし、中世人ダンテによって地獄の底の方に落された人物は多くても、なぜフリードリヒのみが「玉座の上の最初の近代人」であり得るのかという疑問を念頭に置いてわれわれは先へ進もう。

四、H・G・ウェルズのフリードリヒ像

いったい、フリードリヒを最も高く評価している歴史書はというと、私の知る限りでは、H・G・ウェルズの『世界文化史大系』[8]である。

「そんな物は歴史書ではなくて通俗読物であり、著者もまったく歴史家ではない」と言われても困る。この、恐らく現在では読む人が少い大冊が、しかし二十世紀前半において教養人必読とされたことは、二十世紀後半でのトインビー『歴史の研究』に匹敵する。ある時代が、歴史についてどのようなイメージを持とうとするかを象徴的に示す書物はあるものである。それに描かれた個々の事実の正否は必ずしも問わなくて良い。とするとH・G・ウェルズのこの本も明らかに一つの時代を代表する歴史書であると呼んで構わない。

ともあれ、少年時代に私は『世界文化史大系』を通読した。その中で著者が力を籠めて語っている「フレデリック二世」なる中世暗黒時代の王が印象に残った。もちろん、その当時はフレデリックがフリードリヒであることに気がつかない。「王」と「皇帝」とをはっきり区別すべきことも知らない。そのフレデリックがシチリアにいたことも認識の外である。ただ、一人の天才的な君主が奇跡的に出現し、無智頑冥の代表である「法皇」（戦前のこととて〝教皇〟という訳語が定着していなかったのであろう）を向うに廻して巧妙果敢に戦った――そうした印象を受けた。あれを読んだ若年の頃、私もいくらか進歩と啓蒙の徒であったのだろう。

「……彼（フレデリック）は、今や、漸く欧羅巴世界の事象に訪れんとしつつある、或新たな諸威力の具顕者として、其頗る顕しい典型なのである。」そうウェルズは言っている。彼の叙述には特色があって、歴史上の事件にしろ人物にしろ、網羅的に取り上げない。重点的、典型的である。その書き方のはっきりした実例がフリードリヒの場合であった。

もう少し詳しく紹介して見よう。

『世界文化史大系』The Outline of History は戦前昭和四年に翻訳が刊行され日本の読書人に親しまれた教養書の由である。[9] 著者は元来が小説家であり、この本にも絶えずそこはかとなくユーモアと皮肉が漂っている。次のような文章はどうだろう。「皇帝フレデリック二世と云うは、凡そ第十三世紀なる時代が産み出し得た当時の懐疑者叛逆者という類の人物の何たるかをまざまざと今日に諒解せしめるに頗る便利な好個の標本である。夫故茲に此興味ある聡慧な皮肉屋の事柄を少しく御紹介して置こう。父親は独逸皇帝ヘンリー四世であり、[10] かのフレデリック・バルバロッサは其祖父に当り、母親はノルマン人なるシシリー国王ロージャー一世の娘である。[11] 一一九八年、フレデリックは齢漸く未だ四歳と云うに、此シシリー王国の王位を継承した。六ヶ月の間母后が其後見人であったが歿ったので、法王インノケント三世が一一九八年から一二一六年迄、摂政兼後見人となっていた。

フレデリックは、殆んど類を絶して立派な、そして驚くべく幾多の要素の混じった、いい教育を受けたものらしい。其達成した美事な教養のゆえに、スッポール・ムンデイ即ち「世界の驚異」という綽名を媚び奉られた。基督教については、阿刺比亜人回教徒の基督教観の何たるかを知り、阿刺比亜人に就ては基督教徒のイスラム回教観を聴かされた結果として、彼は何れにしろ、宗教と云ふものはどれもこれも要するに皆ペテンである、偽瞞である事をつくづくと悟って了った。（中略）……フレデリックは大平に自分の説をどしどししゃべり、その神様罵倒や異端振が、今日に迄文書記録として立派に存して居る。[12]」

以上は『世界文化史大系』第三十二章「基督教と十字軍」第十三節「皇帝フレデリック二世」の冒頭部分である。この第十三節および第十一節「十字軍」との二個所にわたって相当量のフリードリヒについての記述がある。著者が全面的な共感をフリードリヒに抱いているのが、これだけの引用によっても察せられるであろう。いま引用した部分の中段――キリスト教とイスラム教についての――が、本稿冒頭のディルタイの文章に対応することは明瞭である。

この機会に、フリードリヒの伝記的細目を多少つけ加えておく。上に引用したウェルズの文中〝類を絶して立派な教育〟を受けたとあるが、いったい誰が彼の教育を配慮したのかは諸文献によっても十分明らかではない。ただ彼について類書が口を揃えて語っているのは、フリードリヒが類のないポリグロット(多国語に通じた人)であった事実である。当時のパレルモは、ユダヤ人、ノルマン人、ギリシア人、アラビア人、イタリア人、ドイツ人が混り合って住む〝バビロン的な言語の混乱[13]〟の町であったという。もちろん、天賦の才能もあったろうが、そんな環境で彼はヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、アラビア語、フランス語、ドイツ語、それにイタリア語(シチリア・アプリア方言)を能くするコスモポリタンに成長するのであった。

七歳の時、彼は親しく教皇イノケンティウス三世の後見の下に入るため、ほとんど強制的にローマへ拉し去られる。ただしここで彼は、次の教皇となるホノリウス(三世)の愛育を受けたという。一二一二年の三月、彼が家臣団の諫止を振り切って、シチリアから一隻の傭い船で〝乞食さながらの態〟で対立皇帝オットーを倒し自ら皇位を要求するためドイツへと旅立つ場面は小説的でさえある。次に紹介する書物にそんな場面があった。[14]

五、逸話によるフリードリヒ像

私が本稿を執筆しようとした直接の機縁は、たまたまそのフィッシャー・ファビアン著の『ドイツ皇帝たち』という原書[15]を入手したことであった。皇帝という語に普通使われる Kaiser ではなしに Cäsar を使ってあることで分るように、中世の神聖ローマ皇帝を何人か評伝風に扱った本である。かなり大部な、本文が三百五十ページ以上の大判の本であるが、その最終章つまり第十二章がフリードリヒ二世を取り扱っている。著者のフィッシャー・ファビアンが何者であるかを私は詳らかにしない。カバー見返しの著者紹介によると専門の歴史家ではないがドイツ語圏によくある啓蒙的著述家であり、歴史についての著述が何点かあり、本書以外では『最初のドイツ人たち』が二十万部を越すベストセラーになっている由。

当然のことながら、この『ドイツ皇帝たち』も専門の研究書ではない。系統立った神聖ローマ帝国史の叙述ですらない。一読した印象では、もちろん編年体ながら、興味深い逸話をたくさんちりばめた歴史読物といった面がある。筆者にとってそれらの逸話風な事実こそが本稿を書くのに必要な素材であった。筆者は何もニーチェのように「三つの逸話を語ってある人物を彷彿させよう」と志した訳ではない。しかしフリードリヒ二世のような風変りな人物を描くのに逸話的素材なしでは済まないこともまた事実であろう。

著者フィッシャー・ファビアンは、まず、パレルモの町をたった一人でうろつき廻る少年としてフリードリヒを読者に紹介する。町の悪童たちは、相手が誰なのかを知らずに少年フリードリヒの赤味がかったブロンドの捲毛をからかう。そこで少年は恐れ気もなく「ぼくはシチリア王なのだぞ」と一喝し、悪童たちを追い散らすのであった。[16]

その種の、目を瞠るような逸話挿話に事は欠かない。本稿は、なぜフリードリヒが stupor mundi (世界の驚異)と呼ばれ、「玉座の上の最初の近代人」と後世の歴史家から呼ばれるかを主題としており、必ずしも彼が実際にどんな人間であったか――ランケの有名な「それは元来どうであったか」という文句をもじって言えば Wie er eigentlich gewesen ist? だが――というそのことを問題にしない。それ故、筆者は史料としては二次的三次的素材をも本稿において利用するのを躊躇しない積りである。

六、真の〝近代人〟か

フリードリヒ二世の数多い逸話の中で、私が最初に知り深い関心を抱いたのは、次のような話であり、私はこれを故・堀米庸三氏の書いたものによって知った。ちょうど私が歴史を専門に学び始めた頃である。

「だが彼の異端的心情がうかがわれるのは、むしろその学問だ。彼は熱心な動物学者で、彼の動物園には当時知られていたあらゆる奇獣がおり、スコラ学者大アルベルツスを感嘆させたほどの動物学研究をすら著わした。その研究は冷酷とみえるほどの観察と実験にもとづいている。彼はこれを人間に対しても用いたことがある。あるとき彼は、人間が自然のまま育てられたら、ヘブライ、ギリシア、ラテンあるいはその他の両親の言葉のどれを話すだろうかと考え、何人もの赤子を、いっさい人が言葉をかけることを許さずに養育させた。残念ながら結論は得られなかった。実験に供せられた子供がみな死んでしまったからだ。人はそんな実験をした彼の残酷さを非難した。」[17]

この「彼」がもちろんフリードリヒ二世である。上に引用したのは中央公論社版『世界の歴史　第三巻　中世ヨーロッパ』堀米庸三編著からであり、実に多くの読者に読まれたシリーズ中の一冊である。「早くも十三世紀にこんな君主がいたとは」と私は驚いたが、その頃ようやくH・G・ウェルズの「フレデリック二世」と「フリードリヒ二世」とが重なり合って来たのだった。

それにしても堀米氏はどこからこうした事実を知ったのかと、私はやや不思議に思っていたが、また数年ならずしてその疑問は簡単に解けた。堀米氏が拠ったのは他ならぬC・H・ハスキンズ著の『十二世紀ルネサンス』[18]である。同書は二十世紀における中世研究の名著とされるが、その第十章が「科学の復活」と題され、フリードリヒが行なったさまざまな科学上の観察や実験と並んで、この「幼児の言語発達についての人体実験」のことも述べられている。実のところ、私が引用した堀米氏の文章の後半は『十二世紀ルネサンス』からのほぼ逐語訳である。[19]

ちなみに『十二世紀ルネサンス』ではフリードリヒ二世について二十個所以上の言及がある。

上記の同じ挿話を『ドイツの皇帝たち』においてフィッシャー・ファビアンがどう述べているかを見ておこう。ハスキンズ＝堀米氏の叙述よりいくらか詳細であり、細部に違いがある。フィッシャー・ファビアンは「人間による実験」と小見出しを立て、およそ以下のようにこの実験とその失敗、そしてこの話の典拠を示している。

「赤ん坊たちは、とある塔に閉じ込められ、乳母たちは乳をやったり湯を使わせたりするよう命ぜられた。しかし、決して赤ん坊をあやしたり、なにより話しかけたりしてはならなかった。すなわち彼（フリードリヒ）は、そうすることによって赤ん坊たちがどんな言語を話すようになるかを探求しようとした。最古の言語であるヘブライ語か、それともギリシア語かラテン語か、それとも赤ん坊を産んだ母の言語であろうか。しかし彼の努力は無駄だった。というのは、赤ん坊はすべて衰弱して死んでしまったからである。彼らは、育ててくれる人たちが手を鳴らしたり、いないいないばあをしてくれたり、あやし言葉をかけてくれたりすることなしには、生きられなかったのである」[20]――さながら二十世紀におけるスキンシップの実験を見るようではないか。

この文章の出典は、パルマ生まれのフランシスコ会修道僧サリンベーネの『年代記』である由。この修道僧の名は、『十二世紀ルネサンス』の方にも挙げられているが、記録者としてでなく、もっと積極的にこの種の実験を皇帝に奨めた人物としてである。[21]

赤ん坊のこの実験はすでにして陰惨である。もっと凄いのもある。

ある時、皇帝は二人の死刑囚に豪華な最後の食事をさせた。食後、ひとりを眠らせ、他のひとりには数マイル急速に走らせた。しかる後、二人の死刑囚の胃を切り開いてどちらが良く消化しているかを知ろうとした、というのである。[22]

フリードリヒが行なった観察や実験は実に多種多様にわたっており、とうていここに列挙する煩に耐えない。われわれはただ「ロジャー・ベーコンが中世最初の実験家であったという神話はフリードリヒ二世の存在によって打破された」[23]というハスキンズの判断に多少の妥当性を認めれば足りる。「だがこの時、われわれは彼が三百年早く生まれたとか、十三世紀においてすでにルネサンス以降の科学精神を先取りしていたとか、単純に言ってはならない。彼も人の子であり、時代の子である。宮廷で彼はいつも占星術師や魔術師に囲まれており、彼本人は魔王バルゼブブ[24]に魂を売った人間として非難されていた。H・G・ウェルズが描いて見せるほど彼が合理的近代精神を備えた開明君主であったとするのは恐らく誤りである。

ここでは、誰でも思いつくようにフリードリヒをファウストになぞらえるのが最もぴったりしていよう。フィッシャー・ファビアンは、「フリードリヒが関心を持たないような領域はなかった」として、やはりそれをファウスト的衝動だと呼んでいる。ただ、私見によればこのファウストはちょっとアラビア風なのである。「アラビア風ファウスト」などとは形容矛盾だと考えるようでは、その人は文明と文明との接触遭遇について十分な実感をもたないのだ。そう筆者は乱暴に断言したいほどである。

七、ブルクハルトがかく命名す

一般の読書人が最も容易にフリードリヒ二世の姿を垣間見ることができるのは、実はなんと、他ならぬヤーコプ・ブルクハルトの不朽の名著『イタリア・ルネサンスの文化』の中においてである。しかも開巻二、三ページのあいだにおいてである。そして「玉座の上の最初の近代人」der erste Mensch auf dem Thron というエピセット(epithet 形容句、異名)を彼フリードリヒに与えたのもこのブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』なのであった。

ただし十分な予備知識を持たぬ読者は、ここでフリードリヒが突然登場するのに面喰う筈である。もとよりブルクハルトは神聖ローマ皇帝としてのフリードリヒを全く強調していない。当然、神聖ローマ帝国のイタリア政策とか帝権と教皇権の対立という文派においてフリードリヒを紹介している訳でさえない。ここは『イタリア・ルネサンスの文化』の、有名な第一章「芸術作品としての国家」――この der Staat als Kunstwerk という章題の訳し方についてはかねて議論が存し「人工品としての国家」[25]さらには「からくり細工としての国家」と訳するブルクハルト研究者[26]さえいる。――であって、その冒頭での印象的な登場者がフリードリヒなのである。

従って、ブルクハルトにとっては、いわゆる「国家理性」――もちろんブルクハルトはこの Staatsräison などというむきつけの概念を使ってはいないが――を備えた近代ヨーロッパ的国家の、ごく早期における実現者がフリードリヒなのである。

「専制君主が支配した領土の内部状態については、皇帝フリードリヒが改造した南部イタリアとシチリア島のノルマン国家という有名な典型があった。

サラセン人たちのまぢかで、裏切りと危険の中に成長したフリードリヒ二世は、早くから事物を完全に客観的に判断し処理することに慣れていた、玉座に位した最初の近代的人間である。そのうえ、サラセン諸国家の内部とその行政に関するきわめて詳しい知識と、教皇たちを相手の存亡をかけた戦争が、これに拍車をかけた。その戦争たるや、

フリードリヒII世像（Fischer-Fabian「Die Deutschen Cäsaren」より）

双方をして、あらんかぎりの力と手段を戦場に持ち出させたものであった。

フリードリヒ二世の法令は、けっきょく、封建国家を完全に破壊し、人民を、意志も武器ももたないが最高度に納税能力をもった大衆に変化させることになった。フリードリヒ二世は一切の司法上の勢力と行政を、それまでのヨーロッパにとっては未聞のやり方で中央集権化した。」（傍点引用者）[27]

もちろん、以上の叙述は南イタリアとシチリアのノルマン国家についてであり、ドイツを主体とする神聖ローマ帝国についてではない。それは改めて断わるまでもないであろう。ブルクハルトの視角はそこに向いていない。それにしても、十三世紀の初頭にこれほどポジティヴに「中央集権」が語られるというのは、それ自体ヨーロッパ史における異例である。

ただし、本来の神聖ローマ帝国においてもフリードリヒが目ざましい政治的力量を示したことは一般の中世通史が述べる通りである。[28] 彼は一二三一年には西欧最初の国家法典と言われる『皇帝の書』Liber Augustalis を発布している。一二三五年にマインツでラント平和令を公布し、ついでロンバルディア都市同盟と戦ってこれを破るなど、ドイツにおいての治績は優に一つの研究主題をなすに足りる。彼の晩年と彼死後のホーヘンシュタウフェン家とは、しかし急転直下の悲劇によって彩られている。フリードリヒは長子ハインリヒ（七世）をドイツに置いてその衝に当らせたが、やがて父子の間に確執が生じ、父は子を廃してネッカー河畔のヴィンプフェン城に幽閉し、代って異腹の次子コンラート（四世）を後継者に立てざるを得なかった。何よりもフリードリヒと本人がその大業半ばにして一二五〇年急死したことが決定的であった。ホーエンシュタラフェン家出身の最後の神聖ローマ皇帝コンラート四世は早くも一五五四年に死去する。これすなわち神聖ローマ帝国の「大空位時代」開始の合図であった。一方、フリードリヒがあれほどの情熱と力量を注ぎ込んで経営したシチリアは、フランス王ルイ九世の末弟、アンジュー家のシャルルの手に渡る。フリードリヒ二世の庶子マンフレッドとコンラート四世の子コンラディン少年とは共にアンジュー家のシャルルに敗死し、後世バイロンの詩やシューマンの音楽に好個の素材を提供しながら、ここにホーエンシュタウフェン家の血統は絶える。歴史の舞台は大きく暗転したのだった。

八、ギボン、グルッセによる解釈

以上に述べたことからお察し頂けるように、筆者がフリードリヒ像を形成した順序はH・G・ウェルズ『世界文化史大系』――ディルタイ『世界観の研究』、そして第三にブルクハルトによってということになる。その間、堀米庸三氏が一般読者むけに書いたものによって挿

話風な知識を得たことになる。

ブルクハルトの名を出したのなら、ひとはここでその一世紀前つまり十八世紀の歴史叙述を代表するエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』を思い出すべきである。そして確かにその中で、しかも今度は末尾近く同書第五十九章でフリードリヒ二世に出会えるのである。岩波文庫に収められている村山勇三氏の訳によって参照すると、全十分冊の邦訳の第九巻にある。『ローマ帝国衰亡史』各章の標題は、たとえば「第一章　アントニヌスの時代におけるローマ帝国の版図と兵備」といった比較的短いものもあるが、逆にその章の内容を網羅的に書き出したような長い標題が屢々ある。現にこの第五十九章の標題は「ギリシア帝国の保全――第二次及び第三次十字軍の員数・通路・成果――聖ベルナール――エジプト及びシリアにおけるサラディンの統治――彼のエルサレム征略――海上十字軍――イングランドのリチャード一世――ローマ法王インノセント三世と第四次・第五次十字軍――フレデリック二世皇帝――フランスのルイ九世と最後の十字軍――マメルーク隊のラテン族駆逐」とある。この標題によっても察せられる通り、悠々大河の如き叙述の中ではフレデリックことフリードリヒは特に目立った扱いをされていないが、邦訳にして三ページほどの該当部分を前後と参照して読むとギボンが決してフリードリヒを看過したのではないことが分ってくる。彼は教皇から破門の身でありながら十字軍に参加し、ギボンの言葉を借りると「しかし十字軍のあらゆる合理的な目的は血を流さずして達成された」[29]という成果を収める。しかし当時のキリスト教徒から見て、血を流さないようなものが成果であると思われなかったのはやむを得ない。

その点を、二十世紀での十字軍研究の権威ルネ・グルッセの文章を引用して補っておく。「……なんとも情ないエピローグであるが、フリードリヒの十字軍は、とにかく花々しい成功をおさめたのである。一一九〇年このかた同じような遠征が何度も繰り返されたなかで、キリスト教徒の手に聖都を返したのは彼の十字軍だけであった。矛盾だらけの、まさに逆説的な十字軍で、聖地の返還といっても、イスラム教徒の友だちがいに負うことを思えば、はたして十字軍の名にもあたいするかどうか。なるほど、これまでの十字軍をひきいた総帥とは、およそ似ても似つかない皇帝の十字軍であった。（中略）エジプトのスルタンは、友（フリードリヒ）の立場を思いやり、西洋の〝多神教徒〟に対する面子を失わせまいとして、西洋人の執念とまでなった聖墓を贈り物としたのであるから、旅（十字軍）はとにかく成功であった。[30]」（カッコ内は引用者による）

フリードリヒ二世はイスラム教徒に対して成功したが、本来味方である筈のキリスト教徒を怒らせてしまうのである。「……フリードリヒは不実と粗暴な行ないを混ぜ合わせて、正面衝突をしたあげく、世論を〝逆立て〟てしまった。この実に巧妙で、魅力ある政治家が、最後に目的を逃がしたのも、そのためである。貪欲なまでの活動力、およそ無類に柔軟な外交的手腕、偉人としての長所、あまねく行きわたる教養、十三世紀のさなかに、東洋と西洋の和解をかいま見た天才の閃き、等々をもってしても、彼はののしり叫ぶ声に追い立てられて、あとには蛭々とつらなる憎悪や内乱の種しか残さなかった。彼はキリスト教徒の世界に聖都を返しながら、キリスト教徒の世界から呪われた。（中略）フリードリヒの輝やかしい知性に欠けていたもの、この近代の先駆者に欠けていたものは、いったいなんであろうか。おそらくは、ほんのひとかけらのキリスト教的な善意、和らぎ、愛の心であった。[31]」（傍点引用者）

思いがけなく、非常に長い引用になってしまった。しかし、ここに引用したルネ・グルッセの文章の結び、傍点部分の当否は極めて微妙であって私には軽々に判断できない。

いったい、〝十三世紀のさなかに、東洋と西洋の和解をかいま見〟ながら、同時に〝ひとかけらのキリスト教的な善意、和らぎ、愛の心〟を、ひとは持てるものだろうか。その両方を一人の個人に求めるのは無いものねだりではないだろうか。歴史的状況の中でしか人間は生きられない。ルネ・グルッセのフリードリヒに対する評決はそのことを軽視してはいないか。ギボンの描いたフリードリヒの姿とグルッセのそれとは基本的には良く似ている。しかしグルッセの措辞の方がはるかにソフィスティケーティッドである。後世われわれがフリードリヒのために惜しみ、〝かくもあったならば〟との未練の思いを、さらり言ってのけて余蘊がない。それに較べるとH・G・ウェルズのフリードリヒ像などは、その正否はともあれ、泥臭く、単純無類なものに思えてくるのである。

九、しかし、ひとつの疑問

ルネ・グルッセはその十字軍研究を一九三四年から一九三六年にかけて厖大な三冊本に著わしている。現在、私が参照し引用しているのはグルッセ自身によるその要約版ともいうべき『十字軍の叙事詩』の邦訳である。筆者が引用したのはその第十五章「無信仰の十字軍――フリードリヒ二世の異様な十字軍」からである。元の三冊本は博引傍証至らざるはなき上に、見事な文体で書かれた歴史叙述の傑作である由だが、この要約版でさえその一端を窺うことができる。類書では知ることのできなかった、フリードリヒの私生活上の醜行についても書かれてあったりする。グルッセがフリードリヒに冠した面白い異名は〝イタリアのスルタン〟というのである。たとえば、フリードリヒがパレルモに豪壮なハレムを持っていたことは隠れもない。ある人物の生涯について詳しい事実を知れば知るほど、われわれはその人物を一義的に評価し難くなる。フリードリヒのような、いわば大規模なマージナル・マン (marginal man) についてはなおさらである。三つも四つもの世界観の統一をその身に体現し、当時最高の知性と教養を備えていた人物が、たとえばひどく淫乱だったりする事実（グルッセにもフィッシャー・ファビアンにもその種の記述がある）はわれわれを混乱させる。歴史家の相対主義などやわなもので、尋常の規範を超越した人物に対しては歯が立たないという一例だろうか。しかし私は、フリードリヒが「マホメットとモーゼとキリストの三人は最高のペテン師である」と言い放ったと聞いて面白がったり何かを理解した積りにはなりたくない。この言葉そのものもフリードリヒが言ったのではないそうであるが、こんなことを言いそうな人物として彼が受け取られて来たことは事実であろう。そのため私は、少し廻りくどい能率の悪い方法であっても、彼フリードリヒ二世を少しは分るような方法を試みようとしているのだった。

十、トインビーからは

本稿では、ディルタイ、H・G・ウェルズ、ギボン、ブルクハルト、ダンテといった風にいわば何人もの証人を喚問してフリードリヒ二世について証言を行なわせるという手法が採られている。筆者は、有力な証人であり得るかも知れない一人の著作家とその著作に思い到ったので、その証言が得られるかどうか当って見た。筆者が言うのはオスワルト・シュペングラーとその『西洋の没落』のことである。文化哲学者ディルタイがその世界観学の中でフリードリヒを取り上げているなら、〝世界史の形態学〟である『西洋の没落』においてはいっそう取り上げられるにふさわしい。三つも四つもの異った文明を一身に体現した象徴的人物として、フリードリヒ二世をシュペングラーは大きく扱っていたのではないかと、私はそう考えたものの、どうもかつて一読した時の記憶にそれがない。調べて見ると期待はずれであった。た

しかに『西洋の没落』ではフリードリヒについて四、五個所に言及してある。ただし、さほど重要でない個所においてか、重要であっても他の人物と並べて挙げられてあるかであった。第一巻の第三章「大宇宙」の有名な第二節「アポロン的・ファウスト的・マギ的精神」において、〃自分の目に見える権力圏を、その当時知られていた世界と同一視しようとした支配者たち〃[32]の一人として挙げられているのが興味を引くぐらいであり、また『西洋の没落』第二巻では、アラビア式の簿記やそれに基く合理的な財政組織は、ロジェール二世、フリードリヒ二世のノルマン・シチリア国家において初めて西欧へ導入されたものであることが、二個所[33]にわたって強調をもって述べてある。

主題を少しはずれるが、『西洋の没落』に対して毀誉褒貶しきりの中で、とにかく評家が一致して言うのは次の点である。すなわちシュペングラーは彼の言う八個の大文明について該博な知識を駆使して縦横に論じているかに見えるが、実のところ彼が十分な理解をもっているのは三つの文明についてだけであると。その三文明とは、アポロン的なギリシア・ローマ文明、ファウスト的な西欧文明、そしてマギ的なるアラビア文明である。とすればシュペングラーは、まさにその三つの文明の遭遇を象徴する人物としてのフリードリヒ二世その人にもっと着目して良かったのではないか、とは筆者の単なる私見であろうか。

以上の考察は、仮に単なる私見であったとしても、次なる一冊の書物への導入の役割は果してくれる。『西洋の没落』におけるフリードリヒ二世の取り扱いにやや失望した筆者は、これよりアーノルド・トインビーの『歴史の研究』がその厖大で意欲的な体系の中でいかにフリードリヒ二世を位置づけているか、またはいないかを検討しようとするものである。またトインビーがフリードリヒについて下す判断が、トインビーの歴史観と整合的であるかないかを考えようとするものである。

さて、二十世紀においてシュペングラーの『西洋の没落』と並ぶもう一つの文明史観の記念碑的著作『歴史の研究』全十二巻は、たしかに何十度となく、さまざまの文脈においてフリードリヒに言及している。そして、今まで私が挙げて来たどんなフリードリヒ像とも違った像を提示している。さらにこの像は、H・G・ウェルズのそれと同じ程度に明快、単純、統一的と言って良いだろうが、もちろん二十世紀前半の『世界文化史大系』と、後半の『歴史の研究』との違いをもはっきり反映している。進歩と啓蒙とをもはや素朴に信じ得ない今日の読者にとって、後者のフリードリヒ解釈がより説得的に思えるだろうこともまた疑いない。

以下、『歴史の研究』を参照し、引用するに当っては完訳日本語版（全二十五冊・経済往来社刊）に拠る。筆者はこの大著を、原語原版によって一部、サマヴェル編の原語縮約版によってかなり、その邦訳、また中央公論社刊「世界の名著」所収の再縮約版で数回、要するにかなり詳しく読んでいる。完訳日本語版も部分的に相当目を通した。しかしもちろん、本書の中でトインビーがフリードリヒ二世についてどう書いているかの全体は、索引によって検出する以外に方法はない。トインビーの読者ならば誰でも承知しているように、全十二巻の原著は四回に分けて順次刊行された。最初の三巻は一九三四年に、次の三巻は一九三九年に出版された。長い中断があり、第七巻から第十巻までは実に第二次大戦後かなり経た一九五四年に出た。全十巻として一応の完結を見たこの大著には、しかし最初の六巻と戦後の四巻との間に不整合があることは明らかである。その後、一九五八年に第十一巻「地図と地名索引」ついで一九六一年には、諸学者の批判に答えかつ十巻までの自説に修正を加えた第十二巻「再考察」が追加された。

ことごとしく『歴史の研究』の刊行歴まで述べたのは、本稿の主題と関連があると筆者が考えるからである。その点はすぐ後述する。本

書は索引が不備である。というのは最初の六巻分について、次の四巻分について、そして最後の「再考察」について、それぞれ索引が作られていて、全二十五冊分の索引がひと纒めになっていない。（原語版では索引が各巻ごとに分けられているのでもっと不都合なのだが）従って読者はひとつの事項なり人物を検出するために三つに分れた索引をすべて当らねばならない。フリードリヒ二世についてその作業を行なって見て、しかし筆者はトインビーがフリードリヒに言及する仕方にはある意味とパターンが存在することに気づくことができた。

まず事実のみを挙げると、トインビーは『歴史の研究』全体の中で、註をも含めて六十一回フリードリヒ二世に言及している。最も長大な言及は、邦訳版第八巻「文明の挫折2」にあり、この巻の四九八ページから五一四ページまで、十七ページにわたっている。この部分では、フリードリヒの教皇権との闘争が叙述されていて、はじめは中世最大の教皇の一人であるイノケンティウス三世、ついでその死後ホノリウス三世およびグレゴリウス九世を相手どってのフリードリヒの死闘について知ることができる。

六十一回、総計にして百ページに近い言及であるから、トインビーがフリードリヒの中に非常に重要な人物を見ていることは明らかであろう。ただし、先ほど述べたように、『歴史の研究』の前半と後半とでの違いは、フリードリヒの描き方や彼への評価に対してもはっきり影響を与えていると思われる。邦訳十三巻までが原著の六巻までに相当し、邦訳十四巻以降はトインビーが戦後に刊行した部分に相当するのであるが、邦訳第十五巻「世界教会」、第十七巻「文明の空間に於ける接触」、第十八巻「文明の時間に於ける接触」では再びフリードリヒの名が頻々と登場する。

教皇との闘争についても再び論ぜられる。しかし、それが最初の時とは異った筆致であるように感ぜられるのは筆者の先入見の故であろうか。周知の如く、『歴史の研究』前半に示されているトインビーの歴史観は純然たる文明史観と呼んで差支えない。ところが後期のトインビーは次第に宗教色を濃くして行った。「世界教会」を論じながら彼トインビーは「文明とは結局、宗教を生み出させ運ぶための道具に過ぎないのではないか？」とさえ自問している。そうした後期トインビーの立場からすると、今やフリードリヒは無条件で肯定的には評価されない。もちろん彼が〝近代西欧世俗主義の先駆〟[34]として一個の典型であり象徴であることに変りはないが、教皇とのフリードリヒ二世の戦いは、そして彼の強力な専制国家経営は、〝剣によって起つ者は剣によって滅ぶ〟というトインビーが好んで引用する句の実例にされてしまいそうな形勢である。極度に単純化して言うと、〝皇帝はアンチクリストだ〟という、フリードリヒの同時代人の罵言が、何がしかの深い意味を持つとトインビーは言いたいのである。その点は明らかである。だから筆者はさきほど「トインビーの描いたフリードリヒ像は、H・G・ウェルズのそれと同じ程度に明快、単純、統一的である」などという言い方をしたのであった。ただ肯定的と否定的との違いがあるだけである。大げさに言うなら、近代の悲劇は実にシチリアのフリードリヒにおいて胚胎した、そして彼はやはりバルゼブブに魂を売った徒だったかも知れないという訳である。

十一、歴史の法延は成り立つか

まあしかし、フリードリヒを被告とし、トインビーを検事とし、H・G・ウェルズを弁護人とする架空の法廷弁論を考えて見ても仕方がない。世界観的あるいは形而上的な論点を堂々めぐりをするだけである。しかし、さっきも言おうとしたように、そもそも歴史の法廷にかけられないような事件や人物とはあるものではなかろうか。時間がやがて最終的判決を下してくれると、われわれは思いがちである。そう

は巧く行かないよ、とあるいはフリードリヒ二世は言うのかも知れない。

ギボン、ブルクハルト、H・G・ウェルズ、トインビーなどの大物たちがそれぞれの立場から与えているフリードリヒ二世への〝判決〟をさらに統一的に整合させようなどとは所詮不可能であろう。一応の折衷さえできないであろう。正統講壇史学にやや近い立場に立つウィーンの老碩学フリードリヒ・ヘーアでさえ、フリードリヒ二世をピョートル大帝、プロイセンのフリードリヒ大王、（それにどうした訳かスターリン）に比すべき〝啓蒙専制君主〟であるという。[35] 結局、われわれはどんなフリードリヒ二世像を形作ってもよいのであるが、そのことでまさに自分の世界観的立場を明らかに、いや、世界観的立場のなさを明らかにすることになるのではないだろうか。

十二、弁解ふうな結び

神聖ローマ皇帝としては極めて異色であっても、彼フリードリヒが神聖ローマ帝国史全体の中でどう位置づけられるか一瞥しておこうとして、私はJ・ブライスの『神聖ローマ帝国』[36]を当って見た。この本はこの分野では必読の名著の由であるが、いかにせん古い。何と百年以上も前の一八六四年の刊行である。その後の研究は特に法制史の面において精緻を極めたものとなっているに違いない。筆者は中世史家でなく、特に法制史方面には全く理解を有しない。たまたま筆者の視野内に入って来た興味ある一人物を、一種の文化史法手法をもって描こうというのが本稿の意図なのであるから、今触れた点での理解の不備を責めないで頂きたい。

筆者は本稿を執筆するに当って、筆者に可能な限りフリードリヒ二世とその時代の政治史ならびに法制史方面にも目を向けようと思い、その方面では必読とされている文献をも用意した。現にいま、私の書棚にはG. Barraclough : The Origins of Modern Germany それにやはりバラクロウ編の Medieval Germany vol I, vol II.（これはドイツ人学者の論文集の英訳である）が置かれてある。しかし、それらを使いこなすにはもうひとつの論文が必要であろう。私の興味はもっぱらフリードリヒ二世という歴史的個性の上にあったのである。

註

1 ディルタイ『世界観の研究』山本英一訳　岩波文庫　昭和十年刊　八ページ

2 例えばトインビーは『歴史の研究』の中で E. Kantrowicz : Frederic the Second, London 1931 をしばしば援用している。他に筆者が諸書から拾い出したフリードリヒ文献として、書名著者名のみ次に数点挙げておく。Köffler : Kaiser Friedrich II. Klaus Heinrich : Kaiser Friedrich II in Briefen und Berichten seiner Zeit, Darmstadt 1977

3 ここでの「第五回十字軍」とは、いわゆる〝公式の〟数え方によるもので、一二一五年の第四回ラテラン公会議によって決定された十字軍勧説に応じて各地の王侯たちが行なった遠征の総称である。その最後にフリードリヒ二世はイエルサレム王の称号をも帯びて一二二八年――一二二九年ほぼ独力で遠征を行ない、一応の成功を見たのである。

4 パレルモにおけるフリードリヒの宮殿は、同市の南々東約二マイルの Brancaccio の地にあるが、甚だしく破損している旨が既に一八六四年刊の James Bryce : The Holy Roman Empire p. 204 に記されてある。またフリードリヒがパレルモに作ったとされる植物園が、現在のパレルモ大学附属植物園なのかどうか筆者は確認できなかった。ちなみに、ゲーテは『イタリア紀行』中、数十ページにわたるパレルモの部で一度も植物園には触れていない。第三に、フリードリヒは絶えず領内を巡視し各地に城砦を築かせた。アプリアにあるカステル・デル・モンテは現存するそれらのひとつとして有名である。筆者はイタリア旅行の途次、アプリア、カラブ

リアをも一巡したが、残念ながらフリードリヒゆかりの場所は見られなかった。ただひとつ、シチリアのシラクサの町で、彼が建造させたマニアーチェ Maniace 城を見ることが出来た。シラクサの町はその半分が岬の上にあるが、岬の先端にシラクサ港の入口を扼するようにこの城が聳えており、現在でも使用されていて守備兵が駐屯している。

5 ダンテ『神曲』平川祐弘訳、河出書房グリーン版世界文学全集Ⅲ—3 四九ページ

6 前掲書（註5）地獄篇第十三歌、六一ページ。同第二十三歌、一一〇ページに。

7 この点は諸書が言及しているが、例えばE・R・クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路・岸本・中村共訳、みすず書房、一九七一年刊、三五ページを見よ。また、フリードリヒがドイツにあった時、当時のドイツ最高の詩人ワルター・フォン・デル・フォーゲルワィデが皇帝の詩作と文芸保護への頌詩を呈し、返礼に所領を与えられたという記述が後出の（15）ファビアン・フィッシャー『ドイツの皇帝たち』SS 三一四、三一五に見える。

8 George Herbert Wells : The Outline of History 一九二〇年刊。なお次註を見よ。

9 H・G・ウェルズ『世界文化史大系』北川三郎訳、世界文化史刊行会刊。はじめこの訳書は二冊本として出版されたが、筆者が使用したのは敗戦後昭和二十二年から二十四年に出た七分冊本である。

10 ヘンリー四世とあるは訳書をそのまま踏襲。六世つまりハインリヒ六世の間違いであろう。

11 ロージャー一世とあるのも二世の間違いであろう。

12 前掲訳書（9）第五分冊、三一四、三一五ページ。

13 後出（15）『ドイツの皇帝たち』S三一〇。

14 『ドイツの皇帝たち』S三一三。

15 S. Fischer-Fabian : Die Deutschen Cäsaren —Triumph und Tragödie der Kaiser des Mittelalters— Droemer Knaur Verlag, Locarno 1977.

16 前掲書（15）S三一〇。

17 堀米庸三編著『中世ヨーロッパ』中央公論社版「世界の歴史3」昭和三十六年、二三二、二三三ページ。

18 Charles Homer Haskins : The Renaissance of the Twelfth Century, 1927. Meridian Books Edition 1957.

19 前掲書（18）P三三四。

20 フィッシャー・ファビアン前掲書（15）S三四〇。

21 ハスキンズ前掲書（18）P三三四。

22 フィッシャー・ファビアン前掲書S三四〇。

23 ハスキンズ前掲書P三三五。

24 Beelzebub またの名 Lord of Flies. 「マタイ伝」十二—二十四に見える。

25 Jacob Burckhardt. Die Kultur der Renaissance in Italien. 1860. Gesammelte Werk Band III. S 2 邦訳『イタリア・ルネサンスの文化』柴田治三郎訳・解説。中央公論社「世界の名著45」昭和四十一年刊、六四—六八ページ。

26 木間瀬精三『幻想の天国』中公新書、昭和五〇年刊、一五八ページ。

27 ブルクハルト前掲書（25）邦訳、六四—六七ページ。

28 例えば、今野国雄『西洋中世世界の発展』岩波全書、昭和五十四年刊、二六一—二六三ページ。それに堀米庸三『西洋中世世界の崩壊』岩波全書、昭和三十三年刊、本書で堀米氏はフリードリヒを「中世の神聖ローマ皇帝のなかで、最大の人物とはいえないにしても。少くとも最も特徴のある皇帝であった」と評している。

29 ギボン『ローマ帝国衰亡史』村山勇三訳、岩波文庫、改訳版全十冊、昭和二十六年—同三十三年、引用個所は同書第九分冊二三五ページ。

30・31 ルネ・グルッセ『十字軍』橘西路訳、角川文庫、昭和四十五年。原書は René Grousset : L'Epopée des croisades. 1939. 引用個所は邦訳三四四—三四五ページより摘要。

32 Oswald Spengler : Der Untergang des Abendlandes, C. H. Beck, Mün-

chen. Band I. S二五五。

33 前掲書（32）Band II. S四五九、S六〇九。

34 アーノルド・トインビー『歴史の研究』完訳版、全二十五巻、経済往来社刊、昭和四十四年—四十七年、長谷川、山口ほか共訳、引用した句は邦訳第十五巻、二七四—二七五ページにある。

35 Friedrich Heer : Europäische Geistesgeschichte, Kohlhammer, Stuttgart, 1953. S一五四。

36 James Bryce : The Holy Roman Empire, 1864. 東海大学図書館蔵書、検索番号237B・二七二九一三、なお註3を見よ。

補註

本論文を脱稿した直後、フリードリヒ二世の復活伝説についての重要な文献があることに気がついたので記しておく。それはノーマン・コーン著・江河徹訳・『千年王国の追求』一九七七年十一月・紀伊国屋書店刊、である。その第六章が「メシアたる皇帝フレデリック」であり、極めて多くの事実が紹介されている。例えばフリードリヒの死後三十四年の一二八四年、ドイツにフリードリヒを自称する一人の老狂僧が出現しこれを信じてつき従う者が多かったと。類書にもたいてい彼の復活伝説は多少なり触れられているが、ノーマン・コーンの本書が群を抜いて詳しい。